イスラエルの政治と宗教

立山良司

イスラエルは、このところずいぶんニュースに登場しておりますが、ほとんどが中東和平問題という視点から議論されていて、イスラエル国内のことについては日本ではあまり議論されていません。日本人のユダヤ人に対する関心は比較的高いのですが、ユダヤ人とは何かということについて、本はたくさん出ていてもあまりきちんとした議論がなされていません。

私は一九八二年から一九八五年までの三年間、在イスラエル日本大使館の専門調査員としてテル・アビブに暮らしたり、その後もイスラエル政治をフォローしているので何回か訪れています。そのなかで、イスラエルを考えるときに、宗教、つまりユダヤ教を考えなければいけないということで、今日は政治と宗教の関係についてお話しさせていただきます。

一　イスラエルという国家

いまイスラエル国内で一番大きな問題といえば、中東和平問題もそうですし、テロもそうなのですが、それと同時に聖と俗の対立です。いわゆる世俗的なユダヤ人と宗教的なユダヤ人、あるいはユダヤ教徒といった方がいいのかもしれませんが、その対立が非常に激しくなっています。政党でみると、特に世俗的なシヌイと特に宗教的な統一トーラーなどは完全に犬猿の仲という感じで、この二つの対立をみるだけでも興味深いものがあります。

もう一つ、イスラエルの特徴というか基本的な性格として、ユダヤ人の民族主義、シオニズムというナショナリズムに基づいた世俗国家であり、またシオニズムというイデオロギーを抱えた国家であるといえます。シオニズムとは何かというと、簡潔にいって、「ユダヤは民族だから、民族自決権を行使して国民国家をもつ必要と権利がある」という主張です。

そうすると、「ユダヤ教徒」なのか「ユダヤ人」なのかという問題が出てきます。英語ではジューですし、ヘブライ語ではイェフダーあるいはイェフディームというのですが、これは「ユダヤ教徒」も「ユダヤ人」も意味します。日本語だけが不便で、「ユダヤ人」あるいは「ユダヤ教徒」と呼ばなければいけないわけです。いずれにしても、「ユダヤ教徒」イコール「ユダヤ人」であるというのが、イスラエルのイデオロギーの根幹にあります。

二　近代との遭遇とヨーロッパのユダヤ人

少し歴史的なことを申し上げますと、ヨーロッパではフランス革命以降にゲットーの壁が崩されて、十九世紀にユダヤ人が少なくとも法的には解放されるというプロセスがあります。そのなかで、ユダヤ人の側に、あるいはユダヤ教徒の側にといった方がいいかもしれませんが、ゲットーから解放されるときに五つの異なった反応あるいは対応が出てきました。

一つは世俗化あるいは同化で、多くのユダヤ人はこうした反応をみせました。特に西ヨーロッパのユダヤ人にその傾向が顕著です。ドイツなどでは、ユダヤ教徒でも豚肉を食べたり、ごく一般のドイツ人として暮らす傾向が強まっていったのです。

もう一つはキリスト教への改宗で、もっとも典型的で有名なのがハイネです。彼は「キリスト教への改宗はヨーロッパ文明への入場券」というような言葉を残

していますが、キリスト教に改宗することによってヨーロッパ文明の中心に位置していこう、あるいは入り込んで活躍しようというようなことです。メンデルスゾーンなどもそういう流れのなかで活躍しています。

もう一つは同化とは違って、宗教的には熱心だけれども、ユダヤ教そのものをもっと新しい、近代的なもの、あるいは現代的なものに変えていこうという試みです。こうした動きもドイツを中心にして出てきました。たとえば戒律では豚肉を食べてはいけないのですが、豚肉を食べても良いではないかとか、かつて男女は同じ場所ではお祈りしなかったけれど、一緒にお祈りするとか、そういうさまざまな戒律をかなり緩めたのが改革派といわれているグループで、ある程度緩めているのが保守派というグループです。いまユダヤ教のなかでは、もともとの戒律を重んじている正統派、それをある程度緩めている保守派、もっと緩めている改革派という三つの流れがあって、アメリカでは基本的に保守派と改革派の方が多く、イスラエルでは正統派の方が多いのです。

ただ、これはいわずもがなかもしれませんが、正統派に属しているからといってユダヤ教に熱心かというと、これはまったく別の問題です。たまたま正統派の家庭出身だというようなことであって、改革派に属している人が正統派の世俗的なユダヤ人よりよほど宗教的だったりすることはいくらでもあります。ですから、イスラエルにいるユダヤ人のおそらく二〜三割は、まったく戒律を守っていない正統派ということもあるかと思います。

もう一つの反応というのは、超正統派（ハレディーム）、ウルトラ・オーソドックスと英語では呼ばれていますが、これはキリスト教のアーミッシュと似たような感じですけれども、要するに近代を拒否するといいますか、時計を十九世紀ぐらいで止めてしまった人々です。ニューヨークのダイアモンド・ストリートにいくとよくみかける人々がまさにこれで、真夏でも黒い服を着て、カミソリをあててはいけないというのでもみあげを伸ばしている男性の姿をみかけます。絶対に男女同じ場所にはいないなどというように、厳格に戒律を守っています。けれども、宗教熱心なこととお金を稼ぐことは両立するわけで、ダイアモンド産業をしっかり支えているという人々です。こうした超正統派の人々は、東欧からバルト三国にかけて多く出てきたのですが、その後アメリカに移民していった人たちです。イスラエルにも超正統派のグループがあります。この人たちは戒律を非常に厳しく守りますので、ある意味では他のユダヤ人社会と分節化して住んでいます。彼らに対して悪口をいう人は、「自分たちでゲットーをつくって住んでいる」というようないい方をするのですが、彼らはたとえば兵役にもいかず、自分たちの生活を厳然と守っているのです。ですからよく世俗派のイスラエルのユダヤ人が、「我々は銃をもって彼らを守っているけれども、彼らは我々の無事のために祈ってくれている」という皮肉をいいます。

もう一つは、シオニズムの流れを発展させていったグループです。彼らは、十九世紀ヨーロッパにおけるナショナリズムの高揚のなかで、自分たちは何だろうかと問いかけ、ユダヤ教徒という宗教的な共同体ではなく、民族的な共同体であるという考え方を確定していって、自分たちはユダヤ民族、ユダヤ人であるという措定をしていきました。結果的にこのシオニズムは成功して、一九四八年にイスラエルという独立国家をつくることに成功したのです。けれども、必ずしもうまくいったわけではなく、さまざまな紆余曲折があり、失敗の積み重ねがありました。

三　シオニズムとユダヤ教

シオニズムの特殊性について考えてみますと、ユダヤ教との関係においていくつか議論ができると思います。まず一つは、通常のナショナリズムであれば、一定の地域に一定のグループが住んでいて、それがナショナリズムというイデオロギーのもとで民族としての意識をもち、その地域で独立していく、国民国家を形成していくというプロセスが一般的であろうと思います。しかし、ユダヤ人の場合は完全に離散状態にあったわけですから、二つの作業をしなければならない。一つは、散っているユダヤ人をイデオロギー的に結集

させる、つまりある土地に向かわせて移住させるということ。もう一つは、自分たちの国をつくるべき土地を確保するという、この二つの作業が必要だったのです。

それは表と裏のような関係で、土地があればみんなが来る、みんなが来れば自分たちの土地だと主張できるということになります。その結果として、パレスチナの土地が選ばれました。かつて聖書で約束の地とされた土地に戻って、新しい共同体をつくっていくということになったわけです。この段階で、あるいは十九世紀から二十世紀の初めにかけて、シオニズムが、世界に散っているユダヤ人たちをイデオロギー的に教化してパレスチナに移民させることに成功したかというと、実際はほとんど失敗していて、パレスチナに移民した人数というのはきわめて少なく三十万人程度です。他方アメリカには、十九世紀末から二十世紀前半、あるいは戦前にかけて、四百万人ぐらいが渡っています。つまりアメリカの方がはるかに約束の地であり、別の意味で新天地であったわけで、パレスチナは約束の地かもしれないけれども、実際にいくところではないという概念の方が強かったのです。そうしたヨーロッパにいる離散状態のユダヤ人たちを、少しでもパレスチナの地に引きつけるためには、やはりシンボル操作が必要なわけで、その場合に「約束の地」とか「帰還」といった概念が使われたり、ヘブライ語が復活したり、ユダヤ暦が使われたりしました。

たとえば、ユダヤ人が移民することをアリアーといいます。アリアーというのは上に上っていく、上昇するという意味で、要するに約束の地にいくことを意味します。単なる移民ではなく、先祖伝来の約束の地にいくという意味合いが込められているのです。そういう意味では、宗教的な共同体ではなくて民族的な共同体であるといいながら、シオニズムは宗教的なシンボルを多用せざるをえなかったというところがあります。

同時に土地の問題に関していいますと、土地への「回帰」という考えが世俗的なユダヤ人のなかにもかなりあって、やはり根無し草の状態から土地に根を張っていこうとします。シオニズム運動には、キブツ運動

に典型的に現れているように、土地を耕して自分たちの共同体をつくっていくという理想主義的な部分がありました。この土地ということについて、モーゼス・ヘスは「土地なしには、人間は寄生の地位に甘んじざるをえず、他人に食べさせてもらうことになる」といっており、A・D・ゴードンは「土地を通じて労働していこう」といっています。

こうした考えや行動はシオニズムの当初から出てくるのですが、現在の占領地で行われている入植運動にも思想的にはつながっていって、自分たちの約束の地に入って土地を耕し、根を下ろしていくという思想的な系譜につながっていきます。こうした考え方は、どちらかというと世俗的な土地への回帰ですが、まったく同じ現象を宗教的な立場からみている人々がいます。ご承知の通りユダヤ教では、いずれメシアがやってきてユダヤ教徒は救済され、神の国が建設されるという思想が根幹にあります。そうすると、このシオニズムというのは、世俗的なユダヤ人が主張しているけれども、神による救済を早めることなのではないかという、宗教的な議論が十八世紀の後半から出てきます。

たとえば、ラビ・カリッシャーという現在のポーランドあたりに住んでいたラビがいるのですが、彼は「もし我々が土地で働くならば、必ずや神は我々の労働を祝福する。そうして、何にもまして（聖なる地での）ユダヤ人の営農こそが、メシアによる救済に拍車をかける」というようなことをいっています。宗教的な議論をする人々からみれば、世俗的なシオニストがいっていることは、宗教的な動機はないけれども、実は彼らの活動によってメシアの到来を早めているという解釈になるのです。こうした、シオニズムとユダヤ教を合体させた考え方を宗教シオニズムと呼ぶのですが、現在では国家宗教党に引き継がれています。彼らは和平に消極的ないし反対ですが、自分たちの土地を手放したらメシアの到来が遠のくので、パレスチナ独立国家の建設には絶対反対であるという議論になるわけです。

ただ、こうした宗教シオニズムの議論をしていた宗教的に熱心なグループはむしろ少数派で、多くの宗教

的な勢力はシオニズムに反対しています。あるいはかつて反対だった人々が多いのです。それはなぜかといいますと、彼らは本来メシアの到来というのは神の意志によるものであって、人間がどうこうするものではないと考えているからです。個人のレベルで約束の地に移住してアリアーを行うのは許されるけれども、人間の力でユダヤ人あるいはユダヤ教徒の国をつくるために集団でアリアーを行ったり、そのために宣伝するというようなことは、神の意志に反するものであり、神に対する冒涜であるという議論から、シオニズムに対して反対したのです。こうしたグループの多くは超正統派で、現在では、先ほどふれた統一トーラーやシャスというグループです。彼らは、いまはイスラエルという国家を認めていますが、かつては認めていなかったり、国家と対立関係にあったグループです。現在でも、きわめて少数ですが、超正統派のなかでイスラエルという国家を認めていないユダヤ教徒のグループもあります。彼らはイスラエルの国籍をもっていませんし、パスポートももっていません。ほとんどがアメリカのパスポートをもってエルサレムで暮らしています。「我々はイスラエル人ではない。イスラエルという国家を我々は受けいれられない」と主張するグループが、現在でもあるのです。多くの非シオニストのユダヤ教徒、あるいは反シオニズムのユダヤ教徒だったグループも、ホロコーストを契機として、イスラエルという国家の独立を受けいれ、あるいは存在を受けいれるという状況に変わってきました。そのなかで政党活動を行って、自分たちの発言を強くして、戒律を厳しく守らせる社会をつくっていこうという活動をしているのが、この非シオニストの統一トーラーやシャスという宗教政党です。ですから、その意味では先ほどの国家宗教党とは立場がかなり違っていて、非シオニスト政党というのはあまり和平問題に興味がなく、むしろ戒律を守るか守らないかの方にはるかに関心があるというわけです。

四　イスラエルとユダヤ教

シオニズム自体が、もともと世俗的なものとして発

展しながら、きわめて宗教的な側面をもっていますし、ユダヤ教徒のなかにもいろいろな考え方や立場の違いがあり、世俗的な人もいればきわめて敬虔な人もいます。ですから、国がどうあるべきかということに関しても、ユダヤ教の戒律に基づく国家であるべきだという議論から、単にユダヤ人の国家にすべきだという議論までいろいろ出てきて、それがいまのイスラエルの政治と宗教の関係を錯綜させている背景になっていると思います。

これは独立宣言のなかの記述ですが、「エレツ・イスラエル（イスラエルの地という意味）においてイスラエル国として知られるユダヤ（人）国家の設立をここに宣言する」と書いてあって、同じ独立宣言のなかに「宗教、人種、あるいは性に関わらずすべての住民の社会的、政治的諸権利の完全な平等を保障」と書いてあります。この独立宣言を読む限り、本文中にはユダヤ人ともユダヤ教徒とも読める言葉しか書いていないのですが、ユダヤ国家を設立すると宣言しながら、それは宗教とは関係ないということを書いています。

しかし、本当に宗教とは関係ないのかというと、そうとはいえなくて、イスラム教徒あるいはキリスト教徒のパレスチナ人で、イスラエル国籍をもっている人が現在五人か六人に一人いるのですが、彼らは二級市民的な扱いを受けているというのが現状で、完全な平等が保障されているとはいい難い状況にあります。

ここで「ユダヤ人」とは何かという問題が出てきます。イスラエルには帰還法という法律があります。これは、「世界に散っているユダヤ人、あるいはユダヤ教徒はイスラエルに戻ってきてください」ということを書いている法律なのですが、たとえば、私がイスラエルにいって国籍を取得したいと主張しても、私はユダヤ人あるいはユダヤ教徒ではないので、簡単には取得できません。非常に難しい手続きがあって通常は取れないのです。ところが、もし私がユダヤ教に改宗していれば、イスラエルにいって手続きをすればあっという間に国籍が取れて、新しい住宅や定住するための資金がもらえたり、半年から一年間税金を免除されたりと、多くの優遇策があります。

そうすると、「ユダヤ人」という概念もやはり定義しなければなりません。帰還法では、「ユダヤ人とは、ユダヤ人の母から生まれたか、あるいはユダヤ教に改宗したもので、他の宗派の成員ではないものを意味する」となっています。この「他の宗派の成員ではないものを意味する」いうのは、独立後しばらくして後から入れられた文章です。なぜかといいますと、ユダヤ人の母から生まれてキリスト教に改宗した人間が、「私はこの法律ではまだユダヤ人だから帰還を認めろ」といって訴訟を起こしたのです。それが大きな問題になって、この語句が加えられました。現にユダヤの律法では、宗教的な立場からみると他の宗教に改宗してもユダヤ教徒とみなされます。キリスト教に改宗しようがイスラム教徒に改宗しようが、ユダヤ人の母から生まれれば、その人はユダヤ人、あるいはユダヤ教徒という規定になっているのです。ですからこの条文を入れるときも、律法と違うということで宗教界はかなり反対したのですが、他方で現実の国家として国民の定義をするときに、よりきちんとした定義が必要だということで採用されました。

これはアメリカのユダヤ人との関係で議論になってくるのですが、ユダヤ人の定義として「ユダヤ教に改宗したもの」となっていますが、先ほど申し上げたように、ユダヤ教はいま大きく分けて正統派と保守派と改革派の三つに分かれています。イスラエルのユダヤ教徒の多くは正統派なのですが、彼らは、基本的に保守派と改革派のラビが改宗させたものはユダヤ教徒にはならないといっています。そうすると、アメリカのユダヤ人の多くがユダヤ教徒ではなくなってしまう。あるいは、帰還法でいうユダヤ人ではなくなってしまうということになります。ここのところは、イスラエル政府は厳格な解釈を示していません。アメリカのユダヤ人がユダヤ人でないとなれば、当然大変な問題になってしまうのでうやむやにしているのですが、時々問題が生じています。ただ最近は、イスラエルのなかでも保守派や改革派が徐々に発言権をもつようになってきています。たとえば、正統派には女性のラビは存在しないのですが、改革派には存在します。こうした

女性のラビがイスラエルで活動することもみられるようになってきています。

もう一つの大きな問題は、我々はユダヤ人国家という表現をよく使います。これは英語の「Jewish State」、ヘブライ語の「Medinat Yehudit」の訳なのですが、これについては三つの解釈が成り立ちます。つまり、「ユダヤ人国家」とするか、あるいは「ユダヤ教徒国家」とするか、「ユダヤ教国家」とするかという三つの解釈です。

イスラエル人の論文でこういうことを書いているものがあって、それをさらに私が解釈したのですが、ユダヤ人国家という言葉が意味しているのは、民族国家あるいは国民国家ということです。ユダヤ人は世俗的であれ何であれ、民族としてのユダヤ性を重視して、宗教すなわちユダヤ教はあくまでも個人の問題であって何の関係もないというような、民族意識でアイデンティティを形成する集団による国家と考えていただければいいと思います。

ユダヤ教徒国家というのはそうではなくて、ユダヤ教徒の集合体としての国家であるということです。ただし、宗教をどこまで重んじるかというのは、これまた個人の問題ですが、民族というよりはユダヤ教徒としてのアイデンティティを重視すべきだという流れと考えていただければいいでしょう。

第三のユダヤ教国家というのは、これはまさに宗教政党などがいっていることですが、ユダヤ教の戒律を実現する場としての国家ということです。たとえば、よく問題になるのが、ユダヤ教では金曜日の夕方から土曜日の夕方までが安息日ですが、そのときはいっさい労働をしてはいけないということになっています。現在のテル・アビブはきわめて世俗的な町ですが、エルサレムはかなり対照的で、金曜日の夕方になると町が本当に静かになってしまって、人々はあまり表に出てきません。ところが、エルサレムでもだんだん世俗化が進んできて、金曜日の夜に映画館をあけてもいいではないかとか、サッカーの試合を金曜日の夜エルサレムでやるといった動きが出てきて、宗教界と対立しています。あるいは、イスラエルの主要な公共の交通

機関はバスですが、バスもほとんどの地域では金曜日の夕方から土曜日の夕方まで完全にストップします。それは、車を運転するのは労働になるからで、あるいは乗ることも労働になるので完全にストップするのです。しかしそれでは不便ですので、たとえば世俗的な人々が多い北の方のハイファという町では、安息日でもバスが運行されています。そういうところでまた対立が生ずるわけです。

ユダヤ教国家であるということは、ユダヤ教の戒律を重んじなければいけないということです。ユダヤ教徒国家であれば、戒律を守るか守らないかは個人の問題であるという議論になるのですが、ユダヤ教国家の観点からすると、イスラエルという国は、戒律すなわち宗教的な教えを実現する場なので、それを全員が守らなければならない。世俗的であろうが何であろうが関係なく、バスは全部金曜日の夕方から止めなければいけないし、豚肉はいっさいイスラエル国内で売ってはいけないという主張になります。大きく分けて以上三つの考え方が現実に対立しているというのが、いまの実状ではないかと思います。

もう一つ、中東和平問題、パレスチナ問題との絡みでいいますと、先ほど宗教シオニズムのところで少し申し上げましたが、一番大きい問題は、「エレツ・イスラエル」つまり「イスラエルの地」というのは、どこからどこまでなのかということです。もちろん、どこからどこまでなのかは独立宣言にも書いてありません。いまのところ、イスラエルの国境が画定しているのは、エジプトおよびヨルダンとの国境です。北の方でシリアおよびレバノンとの国境は、まだ両国とも平和条約が結ばれておりませんから画定していません。ですから、ゴラン高原はどちらの領土なのかという話になるわけです。

あと最大の問題は、ヨルダン川西岸とガザ地区をどうするのかということです。最大の領土を要求しているマキシマリストのグループは、ヨルダン川西岸、あるいはガザ地区は全部エルツ・イスラエルの一部だから手放すべきでないと主張しており、対称的にミニマリストは全部パレスチナに返していいと主張していて、

その間にはある程度返そうという意見もあります。

かつて暗殺されたラビン首相がひきいていた労働党など左派ないし中道左派のグループは、どちらかというと領土的には妥協してもいいのではないかという考えをもっています。一方で大イスラエル主義と呼ばれる、イスラエルの領土を拡大する、あるいは現在占領下にある地域も手放さないという考えをもったグループもあります。大イスラエル主義のなかには二つの流れがあり、リクードなど右派は、民族的な視点から先祖伝来の土地なのだから手放したくない、あるいは安全保障上の理由から手放したくないという意見です。もう一方の宗教シオニズムの側は、約束の地すなわち神からもらったものであり、かつメシアの到来を早めようとしている状況下で、イスラエルの占領下に入った土地を手放すことは、神に対する冒涜になるから認められないという意見です。

たとえば、一九九五年十一月にラビン首相を暗殺したのは二十才のユダヤ人青年だったのですが、彼は宗教シオニズムの信奉者でした。ラビンはPLOと平和協定を結んで土地を手放そうとしている。これは神に対する裏切りなのだから許されない」ということで、犯行にいたったようです。彼は裁判のときに、「私はラビンを殺した。これは事実だけれども、私は神の意志によってやったのだから、人間の法律では有罪かもしれないが神の法では無罪である」という主張をしました。もちろん裁判では有罪になり、イスラエルでは死刑はありませんので、終身刑をいいわたされて現在も服役中です。イスラム復興主義のグループ、たとえば一九八一年にエジプトのサダト大統領を暗殺したエジプト人グループも、裁判で「私たちは無罪である」という主張をしました。彼らは、「サダトは非イスラム教徒のユダヤ人と平和条約を結ぼうとした。これは神に対する裏切りである」という議論を展開したのですが、これとまったく同じ議論を、ラビンを暗殺した青年は裁判で主張したわけです。

時々ユダヤ人の手によるテロが起きることがあります。たとえば、ヨルダン川西岸にヘブロンという町がありますが、一九九四年にその町のモスクでお祈り

をしているイスラム教徒に向けて、ゴールドシュタインというユダヤ人の医者が自動小銃を乱射して、三十人ぐらいが亡くなった事件がありました。彼もやはり同じように、この土地を手放すことは絶対に許されないという考えに基づいていたのです。つまり、ユダヤ教過激派ともいえるグループがイスラエルには少数ですが存在していて、彼らが時々活動をしているのです。いま、ロードマップ構想ということで和平の動きが一応高まっています。実現については、はなはだ危ぶまれていますが、将来もし実際にパレスチナ国家ができることになったとしても、今度はユダヤ人側の宗教的な理由によるテロが起きないとも限りません。実際これまでもあったわけですから、十分ありうることです。

すでにお話ししましたが、宗教政党には二つの流れがあって、一つは非シオニズム政党で、彼らはあまり政治には関心がありません。一方は宗教シオニズム政党で、これは和平に反対しています。ただ、最近の流れをみていますと、一九八〇年代あるいは九〇年代に入ってからかもしれませんが、非シオニズム政党のなかの若いグループが、だんだん政治に興味をもつようになってきたという気がします。つまり、和平に反対する宗教シオニズム政党との差がなくなってきているということです。たとえば、シャロン首相を支持しているグループなどのなかに、こうした非シオニズムの超正統派のグループが存在しています。

イスラエルを訪れてご覧になるとわかるのですが、宗教シオニストたちの多くは黒い服を着ていません。むしろアメリカから来たユダヤ人が多く、彼らはキッパという敬虔なユダヤ教徒がかぶる帽子というか小さな布は必ず着用していますが、あとはジーパンをはいて肩に自動小銃をもっていたりします。一方非シオニズム政党の超正統派のグループは、ダイアモンド・ストリートでみられるように、真夏でも真っ黒い服を着て、黒い山高帽のようなものをかぶっています。その黒い服を着ている人々のなかで若手の者が、和平反対の活動をしているという状況が出てきている気がします。非シオニズム政党はもともと反世俗主義であるがゆえに反ナショナリズムという立場を取ってきたので

すが、実際にイスラエルという国家ができて五十年以上たって、彼らはそのなかで育ってきて、兵役にはいかなくても、いつもきわめて厳しい状況のなかにいます。そうしたなかで、むしろナショナリズム的な傾向が強まってきて、宗教とナショナリズムが合体するという状況が、非シオニズム政党でありながらシオニズム的な議論をするという形で出てきているのではないかという気がします。

これは蛇足になるかも知れませんが、イスラエルのユダヤ人社会というのはきわめて多様で、イスラエルの作家ダビッド・グロスマンは、これを「パッチ・ワーク」と呼んでいます。ご承知のように、ヨーロッパ系のユダヤ人はアシュケナジームと一般に呼ばれていて、アジア・アフリカ系のユダヤ人は、厳密にいうとまた違うのですが、スファラディームと呼ばれています。本来スファラディームというのは、スファラード（もともとスペインという意味）からきていて、かつてレコンキスタの前にスペインに住んでいたユダヤ人がそれです。レコンキスタでイスラム教徒と一緒にイベリア半島を追い出されて各地に散ったのですが、彼らは自分たちをスファラディームと呼び、それがだんだん拡大解釈されていって、アジア・アフリカ系ユダヤ人はスファラディームと称されるようになりました。これとは別に、自分たちは東洋系のユダヤ人であるという主張をするグループがいて、彼らは自分たちをミズラヒームと呼んでいます。ミズラフというのは東洋あるいは東という意味です。

ソ連がユダヤ人の出国を自由化したのが一九八九年ですが、それ以降ヨーロッパからイスラエルへのユダヤ人移民が急速に増えました。ここ十年くらいの間に百万人近いユダヤ人が旧ソ連から移民したといわれており、一時はイスラエルの町を歩いていてもロシア語がずいぶん聞こえてくるという感じでした。また、イスラエルではロシア語新聞やロシア語放送もあり、テレビでも、たとえば英語の映画にヘブライ語とロシア語のサブ・タイトルがつくということもあります。ロシア系以外にもさまざまな人々がいて、まさにパッチ・ワーク状態になっており、しかもそのなかで世俗

的なグループと宗教的なグループに分かれているので、いろいろな意味での亀裂があるというのが現在のイスラエル社会だと思います。いま世界のユダヤ人は千二百から千三百万人といわれておりますが、そのうちの五百万人強つまり半分近くがイスラエルに住んでいます。一方、アメリカにいるユダヤ人が約六百万人といわれており、全体としては、イスラエル国外にいる離散ユダヤ人、ディアスポラ・ユダヤ人の方が多いという状況です。

これは宗教と政治とは直接関係ない話ですが、イスラエルにいるユダヤ人たちには、「自分たちはユダヤ人のアイデンティティ、あるいはユダヤ教のアイデンティティを守るために銃をもって戦っているのだ。もしイスラエルという国がなくなったら、再びホロコーストのようなことがあったときにどうするのだ」という主張があります。あるいは、アメリカのユダヤ人はどんどんアメリカ社会に同化していて、いずれユダヤ人はいなくなってしまうのではないかという懸念があるのですが、それに対して、「それを一生懸命くい止めているのが我々イスラエルに住んでいるユダヤ人であって、爆弾テロにあいながら戦っている。それを、アメリカのユダヤ人は単に小切手を我々に渡すだけで、命を張って守ろうとはしていない」という批判をするわけです。

他方、アメリカにいるユダヤ人は、「イスラエルのユダヤ人たちは、あたかも自分たちが世界のユダヤ社会の中心に位置しているかのような発言をしているが、我々は従属しているわけではない。アメリカにいるユダヤ人は、アメリカのなかでユダヤ文化を守り、ユダヤ教の教えを守っているのだから、イスラエルが中心であるという意識を打ち出すべきではない」などと対立していたりします。このように、アメリカのユダヤ人たちも複雑な意識をもってイスラエルをみています。

ですから、二つのことがいえるかと思います。一つは、もともと神学的にいずれ約束の地に帰って神の国ができるといわれていたけれども、実際に国家ができて、その現実の国家のためには、国民の定義をしなければならないし、銃をとって守らなければならないし、

金を集めてこなければならないわけです。そうなると、現実にある国家をどうするのかという問題、ユダヤ教の教えと現実にある国家をどう調和させるかということでさまざまな議論があって、場合によっては完全に対立しているグループまでいるということです。

もう一つは、私は海外出張にいくたびにできるだけ各地のユダヤ人社会、ユダヤ人コミュニティーをみにいくようにしているのですが、グローバル化ないし標準化が進んでいるという感じをもちます。たとえば、バクーの少し北のシナゴーグで、一生懸命ヘブライ語を教えていました。ヘブライ語を教えている人はアメリカからきたユダヤ人で、世界的なユダヤ教徒団体から派遣されてきていました。もともとのアゼルバイジャンのユダヤ人コミュニティーが、どんどん世界標準のユダヤ教徒に統一されていくのですが、その世界標準というのはアメリカのユダヤ教徒という感じがします。

つまり、こうした小さなユダヤ人社会が世界中にあるのですが、それがどんどん減っているのです。たとえばモロッコの場合、現在一万五千人くらいのユダヤ人がいるといわれていますが、実体はもっと少なく四～五千人しかいないのではないかと現地のユダヤ人がいっていました。みんな二重国籍をもっていて、多くの人はフランスに住んでいるというのです。いずれにしても、こうした世界に散らばっている小さなユダヤ人コミュニティーがどんどん減っていって、いくつかの拠点、おそらくアメリカとイスラエルと、ある程度住みやすいヨーロッパの国々以外のユダヤ人コミュニティーはいずれなくなる、あるいはなくなる前に標準化されていくだろうという感じがあります。それは、多様なユダヤ人社会という視点からみると残念な気もします。

（たてやま　りょうじ／防衛大学校教授）

（本稿は、二〇〇三年七月十一日に行われた研究会での報告内容を掲載したものです。）